

## 外れることのないように ルカ13:31~35 / 李正雨師

福音書を読んでいると、イエス様がファリサイ派の人々と議論なされたという言葉に触れることがあります。ファリサイ派の人々は、イエス様のお働きを妨げる人として、またイエス様に害を及ぼす人として描写されていることもあります。このためか、彼らについての読者たちの印象は良くありません。それでは、彼らはもともと悪い人だったのでしょうか。ファリサイ派というのは、BC2世紀に生まれた宗派です。ファリサイとは「区別された人々」という意味です。彼らは、貴族やサトガイ派のように高い階級の人々ではなく、「ハシディズム運動」という敬虔主義運動に積極的に参加していた人々でした。この敬虔主義運動というのは、ギリシャ文化であるヘレニズムからユダヤ文化を守り、神様の言葉である律法を守ろうということから始まったものです。そして、彼らは一般の人々でしたが、自分自身に祭司に要求されていた厳しい規律を適用しました。誰よりも神様の言葉に真剣だった人々、それがファリサイ派の人でした。しかし時間が経つにつれ、ファリサイ派の人々も勢力を持つようになりました。迫害を受けていた時もありましたが、支持を受けていた時もありました。ユダヤの女王であったサロメ・アレクサンドラによって政治に参加させられてから、彼らの精神は風化し始めました。彼らは、ますます規律を守ることに夢中になり、自分たちが持っている名誉や権力のために戦うこともありました。良い精神によって生まれた宗派でしたが、その精神を維持することができなくなると、変わったというのです。

しかし、みんながそのように変わったわけではありませんでした。律法の大学者と呼ばれていたヒレルとか、イエス様を訪ねてきたニゴデモとか、使徒言行録に出てくるガマリエルなどは、ファリサイ派の精神の良い点を持っていた人々でした。福音書に出てくるファリサイ派の人々の中でも、洗礼者ヨハネやイエス様に従っている人が多かったのです。だから私は、イエス様はむしろファリサイ派の人々ともっと議論なされたのではないかと思います。彼らが律法を誤解し、真のファリサイ派の精神を維持していなかったので、イエス様は彼らと多く、深く議論なされたのだと思います。一部の学者の中には、イエス様もファリサイ派の出身だと言う人もいます。それほど、当時のファリサイ派は人々に認められており、墮落した悪い人だけではなかったというのです。今日の福音書では、このようなファリサイ派の人々が登場します。彼らはイエス様にヘロデのことを知らせます。それは、ヘロデがイエス様を殺そうとしているということでした。31節の言葉です。「ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。『ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています』」

このファリサイ派の人々については、いろいろな見方があります。イエス様に従っていたファリサイ派の人々という見方もあり、イエス様をだましてエルサレムを去らせようとした意図だという見方もあり、イエス様には反対するが、ヘロデの手には渡さないようにしたという見方もあります。何が正しいかは分かりませんが、これらのことを合わせて考えると、彼らはイエス様の死までは望まなかったということが分かります。しかし、ヘロデを中心にして、イエス様に反対する人々もかなりいました。彼らは、いかにしてもイエス様がエルサレムに来られないようにしようとしていました。エルサレムの人々がイエス様の言葉を聞かないように、従わないようにしようとしたのです。なぜ、ヘロデと一部の人々は、イエス様がエルサレムに来られるのを反対したのでしょうか。彼らには、洗礼者ヨハネという、彼らにとっては良くない記憶があったからだだと思います。洗礼者ヨハネは、人々の信仰と心を導き、権力を握っている者を恐れませんでした。その結果、多くのエルサレムの人々が洗礼者ヨハネに従い、ファリサイ派の人々やサドカイ派の人々も、洗礼者ヨハネの弟子になりました。ヘロデも自分の結婚問題などが洗礼者ヨハネと絡んでいたことがあり、洗礼者ヨハネを処刑してから、政治的に困難になったこともあります。ところで、洗礼者ヨハネの跡継ぎと呼ばれていたイエス様がエルサレムに来られたというニュースが彼らの耳に入りました。それで彼らは、自分のために、自分の持ち物を守るために、イエス様をエルサレムから追い出そうとしていたのです。ヘロデが殺そうとしているという言葉は、ヘロデだけでなくエルサレムの権力者たちの心を表していると言えるでしょう。

自分の安らぎのためには、真理をも脅かす。これが彼らの心でした。

今、私たちが生きているこの世も、これとは大きく変わらないようです。21世紀を生きている私たちですが、私たちはウクライナの戦争やアフガニスタンとミャンマーの迫害などを毎日のニュースで見聞きしています。迫害する側は、みんなもっともらしい名目を立てていますが、その実はすべてが自分の側のためです。強い者が自分のために弱い者を抑圧しているのです。これは神様の言葉と正反対になることです。果たして、神様が彼らの側にお立ちになるでしょうか。強い者を支持し、弱い者を抑圧しているのを御覧になって、よくやったと思っておられるでしょうか。私たちの神様は、弱い人の神様です。マタイによる福音書5章の言葉のように、貧しくて、悲しんで、柔和な者の神様です。これを私たちは、忘れてはいけません。いつも弱い人の側に立ち、彼らを応援し、彼らのために祈ること。これがイエス様が私たちに教えてくださったことだと思います。

今日の福音書で、ヘロデはイエス様を脅迫しましたが、イエス様はその脅迫に乗られませんでした。イエス様はご自分のところに来たファリサイ派の人々とにこう言われます。32節の言葉です。「イエスは言われた。『行って、あの狐に、「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。』」この言葉の意味は何でしょうか。ヘロデの脅迫にもかかわらず、イエス様はご自分のことをなさるといことです。イエス様は人々に福音を伝え、悪霊に取りつかれたものといろいろな病気を癒されました。これをエルサレムでもなさるといのが32節の言葉です。そして、これがご自分の道であり、ご自分の死がエルサレムで起こることを言われます。33節の言葉です。「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。」

イエス様はご自分の死がどのように起こるのかを知っておられました。このために神様がお遣わしになったからです。イエス様の死は、すぐには起こりません。しかし、これらのすべての過程は、イエス様を苦しめたと思います。それでイエス様は、エルサレムのために嘆かれます。彼らの選択が間違っていることを、彼らが神様の言葉を誤解していることを、預言者を拒否して殺した過去のエルサレムの姿が再び現れることを嘆いておられるのです。34節でイエス様はこのように言われます。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」エルサレムは、自分の欲望のためにイエス様を受け入れませんでした。そして彼らは、自分が選んだことに対する対価を受けるようになるのです。

私は、「精神」というものは本当に重要だと思います。どこに属しているか、何をしているかよりも、どんな精神を持っているかがもっと重要だと思います。敬虔なユダヤ人が自分自身を「ファリサイ派、区別された人々」と呼び、敬虔のために自分自身に厳しかったとき、人々は彼らを認め、尊重しました。しかし、彼らが自分たちの力のために戦い、他人に見せるために律法を守ったとき、人々は彼らに従っていませんでした。ファリサイ派という名前は、もはや人々にとって尊重の意味にならなかったということです。これは私たちにも、当てはまる言葉だと思います。今、私たちは教会に通っています。しかし、私たちが教会に通っていること、礼拝に出席することは、信仰のすべてではないと思います。私たちがイエスの精神を持っているか、私たちがイエスの教えに従っているか、これが本当の大事なものだと思います。私たちが私たちだけの救いのために教会に通っていれば、それは御言葉に外れていることです。私たちが私たちの安らぎのために祈れば、その祈りはふさわしい祈りになることはできません。先週の水曜日の黙想会の箇所を最後にして、今日の説教を終えようと思います。ルカによる福音書第21章36節の言葉です。「人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」私たちは、私たちの道から外れることのないように、常に目を覚まして祈らなければなりません。イエス様のこの教えがいつも私たちを導いてくださいますように。私たちがイエス様の精神を失わないように、主の御名によって祈ります。アーメン